

フランスでの現地調査及び博士契約取得に向けた準備



地球環境学舎修士 2 年
飯田 梨乃
フランス
2016 年 9 月 29 日～
2016 年 11 月 30 日

渡航概要と内容

修士論文のための AMAP(百姓農業を維持するための団体)に関する追加調査を行うこと、また、来年度における博士契約取得に向けた準備を行うことを今回の渡仏の目的として、フランスのレンヌにある Agrocampus Ouest(農業専門の高等職業教育機関のひとつ)で 2 か月間インターンシップを行った。調査対象者は隣の県、Loire-Atlantique 内で AMAP によって新規就農した農家 8 名と、経営途中で AMAP を開始した農家 3 名である。農家のリストは昨年のインターンシップ受入機関である InterAMAP44 の協力を得た(リストには計 15 名載っていたが、1 名は 2017 年に野菜農家を引退することを理由に情報が得難く、1 名は忙しさ及び健康の理由から調査を断り、残り 2 名は今日に至るまで全く連絡が取れていない)。また、調査対象地が滞在先から離れていることから、InterAMAP44 の一員で昨年初日に受け入れてくれた人が、調査期間中に宿を提供してくれた(計画を立てることが容易になり、研究費用も大きく削減することができた)。10 月は農家と連絡を取り、調査の調整を行うことに 2 週間を費やした。調査は基本的に週末に農場へ赴いて行った。調査後は録音した調査内容の字起こしを行い(2 週間)、11 月に入ってから、投稿論文の草稿の訂正及び昨年度調査を行った農家への追加調査、文献資料調査、来年度の奨学金などの検索などを同時並行で行った。受入教授である Le Goffe 先生とは、インターンシップ期間中に随時、ヒアリングの調査票の確認、結果報告、来年度の進学に関する議論などを行った。

渡航を通じて感じたこと

インターンシップの受け入れ先が正式な研究機関であることによる恩恵の大きさと重要性

を、初めて実感した。今回の渡航以前に、調査を目的とした渡仏は2回経験しているが、今までは調査対象農家に滞在し、農作業及び日常生活を共にしながら、ヒアリング調査あるいはアンケート調査を行っており、正式な研究機関でインターンシップを行ったのは今回が初めてであった。研修生であるために学内の電話から外線に掛けることができないことに不便を感じたが、ヒアリング調査内容の字起こし、あるいは統計資料の解釈において、所属の学生から援助を受けられたことに感謝している。また、調査対象地域では、昨年のインターンシップの受入機関として対応してくれた人たちが、今回の調査においても、農家との連絡を試みたり、宿を貸してくれたりと大変力を貸してもらった。彼らとの議論の中から、研究に関する新たな情報も得られた。2か月という短い滞在期間の中で、受け入れ先の教授及びその他の研究員と研究内容について十分に議論できなかったことが心残りである。以上から、調査地であるフランスに学生として身を置きたいという気持ちが以前よりも高まった。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回のインターンシップで、Le Goffe 先生と議論した結果、Agrocampus Ouest に進学する場合は、経済学であれば修士1回から、社会学であれば修士2回から入学して、基礎知識を身に付ける必要があること、その間に、博士論文のテーマについても十分に議論し、博士契約取得を目指すこととなった。今回の調査に取り組む姿勢などを見て、Le Goffe 先生は博士論文まで指導するつもりでいると言ってくれている。しかし、社会学にも関心があり、社会学の教授と話したところ、私の関心事に興味を示しており、且つ社会学における日仏共同研究団体が存在することから、その団体へのアプローチが可能となれば、日本とフランスの比較研究も容易になるという興味深い話もある。経済学及び社会学のどちらに出願するとしても、給付型奨学金の取得が課題となっているため、まずは来年度(2017年9月以降)の奨学金を取得することに尽力する。

主な奨学金の使途

- *渡航費
- *移動費
- *宿泊費・寮費
- *食費
- *調査費
- *海外旅行保険
- *その他雑費 など



